

虹

たつぷりと眠っているつもりだった。それなのに、八時五分には自然に眼が醒めてしまった。いつもより二十五分遅いだけだ。習慣が身についている。そう思っただけで、自分がとても窮屈な、融通の利かない青年のような気がして、たまらなくなつた。せっかくの火曜日ではないか。あくせくと一日をはじめなくてもいい日なのだ。蒲団の中でぐずぐずとそんなことを考えると、なおさら腹だたしいような気持ちになつてしまった。

家の中は静まりかえっている。耳を澄したが何の物音もしない。きつと母は夜明けとともに起きて、わずかばかり残つた畑の草取りにでも出かけたに違いない。父がああなつてから、母は畑仕事に精を出しはじめた。まるで、むきになつたみたいだ。

母も父同様、変つたのだ。村の人間にあの人のことで弱味を見せたくはないんだよ、と常々口にする。それに父への悪口と愚痴だ。好奇心と薄気味悪いものでも見るような村人の視線を前にして、先手を打つて父をあしぎ

まにいうのは、母がここで生きて行くためにはどうしても必要なことなのだろう。それにここで死ぬためにもだ。村人とは上手につきあわなければならぬ。愚痴のほうは、おもに僕に向けられた。どうしてあたしらはこんな肩身の狭い思いをしなくちゃいけないのかねえ、とか、あの人の身体の中にはキツネでも棲みついてしまつたにちがいないんだ、とか散々こぼす。

——この先もあんな調子だったら、どうしたらいいもんかね、あんたの結婚のことだつてあるし、何かいい考えはないかい。

時々、父のことでそう僕にたずねる。

——ほうっておけばいいだろ。何か他人におかしなことをするわけでもないんだし、それにもう家を出て九ヶ月にもなるんだ。

素気ない返辞に、母は溜息をつく。愚痴を聞いたたり、喋つたりする年齢では、僕はなかった。母とて、相談や悩みをうちあけているわけではないのだ。そんなことは

承知しているつもりだ。できることなら、父をどこか遠くの、村から離れた病院にでも閉じこめておきたいだけだ。それ以上僕がとりあわずにいると、あなたはどうしてそんな薄情な息子なんだろうね、としきりに嘆く。薄情？なるほど母のいうとおりかもしれない。しかし、僕にもいいぶんはある。たとえ母のいうのが当たっているとしても、僕は父の悪口をこれっぽっちだって口にすることはしない。今後そのつもりだ。

さつさと起きてバジャマを脱いだ。ゴールデンウィークまで三週間たらずだ。四畳半の僕の部屋には、あと四ヶ月で二十五歳になる若者が持っているようなものは何もなかった。CDプレーヤーもラジカセもビデオデッキもだ。あるものといったら数冊の怪奇小説と、この村から流れている川に住む野鳥や魚や昆虫、川そのものの写真集だけだ。

この村では車を除けば、それ以外のものは持っていても必要がなかった。なにしろ、レンタルビデオ店もコンビニエンスストアも、ここからいくつもトンネルを抜け、川沿いに車を走らせ、五十分もかけた所にある人口二万八千ばかりの小さな町に行かなければ一軒もないのだ。四月だというのに肌寒い。身震いが起きた。窓をあければ、百五十台はつめこめる無料駐車場と、街の人間が

湖と呼んでいる貯水池とダム堤防が視界に入るだろう。それに、朝の山の冷気が皮膚をこわばらせ、水のかすかな匂いが漂ってくるにちがいない。村の四月は、百九十里以上下った下流にある一千万人以上の人間が住む大きな都会の春とはわけがちがう。

とにかく、と僕はジーンズに足を通し、気持にはずみをつけるために思った。とにかくだ、今日はカビ臭い郷土資料館の受け付けに一日坐っている必要はないのだ。数年前、村役場をやめた六十二歳の館長と世間話をするともない。あそこに一日坐っていたら、まるで僕の皮膚まで眼に見えないカビが生えてしまう気がする。ウェスト・ポイントのジーンズは洗いたてで肌に気持ちいい。フアスナーをしめ、トレーナーをはおる。

川や野鳥や魚の写真集は、館長が貸してくれたものだ。きみは私の後継者なのだから、と彼は勝手に決めていた。

——ダムや貯水池の歴史や、川の生きものについて、よく知っておかなければいけませんよ。

その一冊がひらきっぱなしになっている。黒のハイヒールと半袖のブラウス、白い帽子に、スカートをたくしあげて両足を剃きだしにした若い女が河原を歩いている姿が映っている。柔らかな夕暮れ近い夏の光でブラウア。資料館の後継者になることを想像するよりましだ。居間へ行った。卓袱台に父へ届ける弁当と朝食が用意してあった。火曜日、父の弁当は僕が届ける役目だ。食器の上には布巾がかぶせてある。どうせ、母がせつせと摘んできた山菜料理と塩づけした川魚と、さめたみそ汁だ。

煙草を吸い、窓をあけた。斜面の中腹にある家からは、青黒く水をたたえた貯水池と、がらんとした駐車場が一望のもとに見渡せた。元々、僕の古い家もあの水の底に沈んでいるのだそうだ。

空は曇っていた。ひと雨来そうだ。貯水池の水量は六月の梅雨時に比べれば、そう多くはない。水面にコガモが何十羽と群れている。それに何羽かのユリカモメだ。汚染された下流から逃がれてきた奴だろう。

貯水池のふちに、ダムに通じるコンクリートの道が見える。人は誰もいない。ダムの堤防の所で下をのぞけば、水門からしぶきをあげて流れ落ちる水が見えるはずだ。それが溪流になり、キャンプ場になり、写真集に映っていた剃き出しの足の女が散歩していた河原になる。その先、川がどうなっているのか、知らない。

空腹の朝の煙草はうまかった。窓の敷居でもみ潰し、外へ捨てた。まだ僕は一日をどうやってはじめていいの

スは透け、ブラジャーをしていない乳房がぼんやりとまをみをおびていた。写真の下には夏の河原は都会の香りに満ちている、と書いてあった。

ゴールデンウィークになったら、こんなふうな美しい水や川を求めて、都会の人間が車やバイクやバスで、この村にもわんさとやってくるだろう。貯水池を眺め、ダムを見おろし、一軒だけある村営の土産物屋に立ち寄り、ついで郷土資料館にやってくる。貯水池に沈んだ民家の模型やパネルや、九月の祭りに使う御こしを眺める。

屈んで写真集を閉じた。それから蒲団をたたんで、押し入れにしまった。ゴールデンウィークや夏や紅葉の季節。そうなのだ。確かに都会の香りで満ちるだろう。駐車場は満車になり、民宿も有料のマス釣り場も稼ぎ時になる。僕はといえば、一日、埃っぽい資料館のカウンターに坐り、大人二百円、子供百円の入館料を受け取るかわりに見学のしおりを渡す。あとはやることはない。実際、そうだった。思わず苦笑がこみあげる。ここにいるかぎり、まるで僕の青春は、ダムの底に沈んだ村のよくなものだ。そんなふうに分の年齢を考えることに、どうして耐えることができるだろう。村が都会の香りに満ちる前にどうしてもここを出て行く。仕事はどうにかなるだろう。もう、父のことも母のことも考えたくはな

か、目的を見失っている男のように、人っこひとりない貯水池を眺めていた。駐車場の外れに、小さな東屋とバスの停留所が見えた。停留所の向かいには村営の土産物屋で、まだシャッターが降りている。車は五台、とまっているきりだ。一台は僕のボンゴツの赤のスパルだ。三台はダム職員が見回りに使うジープやトラックで、残りの一台は、潤一のシルバー・ブルーのシルビアだった。他のスポーツカー・タイプに比べたら、ごく安いほうかもしれないが、それでも中古で百四十万はくだらないだろう。十日ほど前、都会に住んでいた潤一は、ふらりと村に戻った。それ以来、車はあそこに置きっぱなしだ。まるで暴走族の忘れ物みただった。そう考えるとおかしかった。

あいつが村を出て行って何年だろう。六、七年。高校を卒業してじきだったから、それぐらいだ。十日たっても、帰る様子もない。あいつがこの村に住みつくとは考えにくかった。何があったところであいつの勝手だ。顔を洗おう。僕の勤める資料館は、土産物屋の陰で見えない。窓を離れ、サンダルをつっかけ、狭い、じめじめした土間に降りたつ。蛇口をひねって、てのひらで水をすくい、顔を洗った。洗いながら休日なのに、何もすることのない自分にあらためて気づいた。酸欠の魚のよう

父に届ける弁当を持って家を出た時、斜面の上から、朝一番のバスが停留所にとまるのが見えた。客は女ひとりだ。土産物屋の従業員なら次のバスだった。遠くから眺めただけでも、街の女だとすぐにわかる。草色のワンピース姿で、ひどく軽装だ。街の人間だとしてもあんな恰好で、のこのこと朝一番のバスでやってくる人間は珍しい。

駐車場に降りるわるい斜面を歩きながら僕は、停留所に降りたった女が、運転手とひとこと会話を交している姿を眼にとめた。本当にこんなに朝っぱらから物好きだ。女は運転手との話をやめ、周囲を見回している。行くべき場所などない。せいぜい、貯水池を眺めるぐらいだ。そうでなければ東屋でも休むかだ。

家を出た時には、貯水池にコガモやユリカモメが水面に浮いているのが見えたが、下るにつれ、コンクリートの堤防にそれらはかくされてしまった。舗装された道路を渡り、駐車場に入った。

不意に父のことが頭に浮かんだ。一週間、どうしていたろう。父が九ヶ月前から自分で勝手に住みはじめた廃屋まで、車で七、八分ほどだ。この村を見捨てて行く者が多くなり、父のような男が住める家がふえたのは、幸

に息が詰まりそうだ。正午になったら、車で遠出しよう。いい思いつきだ。そうきめた。

車をとぼして、とりあえず電車の駅まで行く。都会からの電車はそこが終点だ。ダムや貯水池が見たければ、その駅発のバスで来るしかない。あとは車だ。駅をすぎたら、僕は線路と溪谷に挟まれた道をどんどん下る。レンタルビデオ店やコンビニエンスストアのある小さな町も素通りだ。さらに何十キロか下り、人口十五万の街へ行く。とりあえず、今日はそこにしよう。水はつめたい。むきになって顔を洗い、やみくもに考える。その小都市には映画館が二軒ある。暗がりにはスクリーンを見る。できれば不動産屋もあたってみようか。いや、僕が望んでいる街はもっと下流の大会だ。

タオルで顔をふき、居間に戻る。卓袱台の前に坐って布巾をとる。やはり山菜と川魚だ。父の弁当を見る。なんだかんだいっても、父を飢えさせるわけには行かないのだ。自炊用の食料は月一度、まとめて運ぶ。火曜日には弁当を持って行く。父の様子を確かめる目的もある。朝からぐだぐだ考えていたら、僕も父のように、頭の中に他の誰かが棲みついてしまっても不思議はない。何かをすることだ。人混みの中にあることだ。手早く、僕は朝食をすませた。

運というべきかもしれない。すくなくとも行き場はあるのだ。バスでひと停留所向こうにある村役場では、ぼつぼつと増え続ける廃屋を、都会の人間むけに五千円か一万そこそこの家賃で貸していた。しかしそんな家賃でも、腰を落ち着けて住みたがる者は滅多にはいない。住んでも、半年と持たずに都会に帰ってしまう。あたりまえの話だ。昔から住み続けた者でさえ、一家をあげて見切りをつけたのだ。父はそんな廃屋を、わずか三千円で借りて、母と息子の元から去った。

駐車場は広々として、路面はひえていた。水気を含んでいるように思える。ワークブーツの底が湿った音をたてる気がした。たぶん夜明けにでも、霧がたちこめたのだろう。真つすぐ自分の車に向かった。さっきの女が、停留所の所でこつちを見た。若い女だ。二十五かそこらだろう。バスの運転手は折返し時間を待つあいだ、くつろいで帽子を脱ぎ、ハンドルに両肘をのせてぼんやりと貯水池を眺めている。女がこつちへ歩いてきた。気づかないふりをして、僕は自分の車まで行った。ドアをあけ、父に届ける弁当を助手席に置いた。女はためらわずに車までやって来た。まだ僕は彼女に気づかないふりをして運転席に乗り込んだ。シートベルトをしめた。彼女は一度、車の正面に立ち、ゆっくり運転席のほうに回っ

て来た。ついで、閉めた窓硝子をノックする。僕は窓をあけ、かがんだ彼女の顔を見つめた。彼女もぐっと僕を覗きこんだ。幾らかやつれたような顔だちで、けれど輪郭のやさしい眼をしていた。

彼女はゆつたりと微笑を浮かべた。先にこつちから口をひらいた。

「どうかしましたか」

「ねえ、あなたはここの村に住んでいらっしやるの」

なれなれしくはないが、物おじしない声だった。僕は頷いてみせた。そして斜面に建っている家を指さし、あそこね、と答えた。ここから見ると、家は見すばらしく、くすんで見えた。彼女がちよつと振り返って斜面を見上げ、すぐ視線を戻す。

「いい場所に住んでいらっしやるのね」

何と答えるべきか。ふと、例の写真集にあった足を剥きだして河原を歩いている女を思い出した。それに、両親が有料のマス釣り場を経営している、二歳齡下の利恵のことも。利恵とは月に二、三度、渓谷を下った河原で抱擁しあう。けれども、この女が発散する眼つきやかすれたような声の調子は、利恵とは比べようもなかった。「お聞きしたいことがあるの」

わかることだったら何でも答えますよ、と僕は物わか

ろばせた。

「かくそうとしないでね。ナンバーでわかっているの。あなたはここに住んでいるんだし、潤一のこと知ってはいはずよ。わたしは彼に会いに来たの」

声も物腰も落ち着き払っていたし、断固としていた。

「潤一とはどんな……」

「女友達ってところかしら。ううん、違いわね。実は一緒に暮らしていたの」

あいつは何かまずいことでもしかして、村へ戻ったのだろうか。いや、考えすぎに違いない。派手な痴話喧嘩か、その種のことだろう。とんでもないことをしてかせるような男ではなかった。のこの村へ戻るのからしてそうだった。あいつは都会でどんな生活をしていったんだろう。いずれにしても、僕があれこれ想像すべき問題でもない。それでも潤一に先に知らせたほうがいいのではないか、と一瞬、思った。

「あなた、何か心配しているの。迷惑はかけないわよ」

「迷惑だなんて」

「それじゃ、この村では若い人でも余所者を毛嫌いするのかしら」

「まさか」

僕は答えたが、そんな気持が自然に自分の中にも流れ

りのいい青年のような口振りであった。

「ほら、あそこにとまっている車があるでしょう」

十台分ほど間のある場所にとめてある潤一のシルビアを顎で示した。

「暴走族の忘れものか。目ざわりな車だな」

ほんの冗談を僕は口にした。でも、と彼女がいった。

「ボルシェなんかより、ましでしょう」

「まったくだ」

話のわかる女だ、と思った。確かにあれがボルシェだったら、たまったものではない。

「でも、あれがどうかしましたか」

「あなた、あの車の持ち主を知ってらっしやるわよね。」

どこへ行けばその人と会えるかしら」

思わず僕は彼女の輪郭のはっきりした眼を覗き込んだ。彼女のほうでも、まばたきもせず、僕の内側を見るような眼つきをした。

「さあ」

僕は一瞬ためらい、それを悟られまいとして慎重な声になるよう努めていった。この女がよりよって、朝一番のバスでわざわざここへやって来た目的が部分的に理解できた。すると用心深い気持が働いてしまった。女が眼を鋭くさせて僕を見、ついで、ゆつたりと口元をほこ

ているかもしれない気がした。

「いいわ。でも、気が変わったら教えてもらえるかしら。」

今日は、一日ここにいろつもりよ」

用事があるんです、まず父に弁当を届けて、と僕はいいかけた。いいわけにすぎない。彼女に必要なのはそんなものではない。わかりきったことだ。

彼女が車から離れた。僕はエンジンをかけた。アクセルを踏み、正面を見つめて発車させた。道に出、右折する時、バックミラーに背筋を伸ばした彼女が映った。潤一もなかなかやるじゃないか。女が追いかけてくるなんて、たいした色男だ。街でのあいつの生活。まさか住み場がなくなつて、上流にまで移つて来たあのユリカモメでもあるまい。スピードをあげる。考えが変わった。父の所へ行く前に、やはり潤一に会つておこう。そうしよう。さして、時間もかからないだろう。

潤一の家へ行くと、玄関先の庭で彼の母親が洗濯物を干していた。僕が車から降りたつものを見るなり、あら、まあ、とうちとけた声を出した。ひさしぶりだった。おはようございます、といつてから潤一のことをきいた。おばさんは洗濯物を干すのをやめ、エプロンで手を拭きながら、せつかく来てもらったのに、あの子、いないの

よ、と答えた。潤一の父は長年、村役場に勤めている。もう出勤した時間だ。庭は広い。花が植えられ、手入れも行き届いている。車の三台は置けるだろう。シルビアを駐車場に放りっぱなしにせずにこの庭に置いてもいいの、と考えながら、あいつ、と僕はひとりごとのようにいった。

「どこへ行っているのかな。ひさしぶりに顔が見たいと思っただけに」

「それがねえ、毎日、朝から夕方まで、ほうけたようにマス釣り場に行っているのよ。何を考えているもんだか」

いい若い者が、恥ずかしいったらありやしないわね、とそしてつけ加えた。

「どこの釣り場ですか」

「ほら、利恵さんのところ」

「マスなんか、この辺の川で釣ったほうがずっとおもしろいのに」

おばさんが頷く。実際、利恵の家が経営するマス釣り場は、釣りもしたことのない街の人々がやって来て、一日愉しむ場所だ。うちのお父さんもあの子とはろくに口も利かないようになってしまっただけ、とおばさんは笑いながらこぼした。珍しいことだった。さっきの女のこととは

耳には入れられない。そう思うと、それ以上、何を話していいか、言葉がどこにもない気持ちになった。ぎくしゃくしてしまいそうだった。その時、おばさんが、思いだしたように、父のことをたずねてきた。

「この頃、お父さんはどんな調子？」

同情でも、詮索でもない口振りだった。

「身体のほうは元気なようです」

僕はいい、これから弁当を届けるころなのだ、と続けた。

「あなたのお母さんも大変だわよね」

ええ、まあ、と僕は曖昧に答え、父がおかしなことを口走るようになった時のことを思い出してしまった。村の誰かが水やお茶の中に、身体の関節や頭を痛くさせる薬をこっそり入れているとか、夜中に誰かが忍び込んで戸戸の隙間から排気ガスを流しこんでいる、などいいはじめた頃のことだ。そんなものはただの筋肉痛とか頭痛だし、気のせいだよ、と僕も母も最初は一笑に付したものだ。ところが父はどんどん真剣になって、そんな仕事をしている人間を俺はつきとめてやる、といいはじめた。俺んこの集落が湖に沈んでダムになる時、一番反対したのは家の爺さまだ、それを根に持っている連中があやしい、などといった。根も葉もないことだ。家が貯

水池の底に沈んだのは、父が産まれたか産まれない頃のことだ。そのうち父はお茶でさえ、滅多に口にしなくなったり、深夜、雨戸に向かって怒鳴ったりするようになる始末だった。すでに、働きの無口で祭り好きの父ではなかった。父はどんどん僕らから遠ざかるばかりだった。一度だけ、資料館の裏手にある駐在にかけこんだこともある。顔見知りのおだやかな初老の警官がこっそり訪ねて来て、母に、村の誰かがひどい仕打ちをする、とあなたの旦那さんがいつて来たんだが、と教えてくれた。母はおろおろした。そんなことを訴えられても、わたしにやあ、どうすることもできんからね、どうだろう、一度、街の病院でみてもらったほうがいいんじゃないかなあ、と警官は茶飲み話でもするようにいった。母は量に額をこすりつけるようにしてあやまった。身体がこきざみに震えていたのを覚えていた。なあにわしはこれが仕事だから、ほら、何でもない、立派な肩書きを持っている街の人だって、わざわざダムに飛び込み自殺したりするからねえ、わからんもんだよ、人間なんて、と警官は母を慰めた。それから母と並んで坐っていた僕の肩を叩き、なんでもないよ、父さんはちっとはっかかり、疲れ

たんだよ、休めばすぐに元に戻るから、といって出て行った。

母はその夜、父を説得しようとしたが、父は頑として聞き入れなかった。元々、頑固な男だった。そんなやりとりを何度かしたあとで、父は隣の集落にある廃屋にひとり住みたい、といい出した。母は折れた。意見をきかれたので、それもいい方法かもしれない、と僕は答えた。それを聞いて、いつもいつも他人ごとみたいに、あなた息子でしようが、と母は声を低めて僕を叱った。とにかく、その時から父のひとり住いがはじまった。そのために、役場勤めの潤一の父が廃屋を捜す骨を折ってくれたのだ。

「本当にねえ、あなたのお母さんも……」

潤一の母がつぶやいた。でもねえ、とそれから満面に笑みを作った。

「あんたみたいな息子がいるもんで、お母さんも安心していられるわね」

まだ何かいいたそうだった。潤一のこと結びつけられそうな予感がした。僕はおばさんがそれ以上喋る前に、利恵のマス釣り場に行ってみますよ、といった。もともと何か必要な気がしたので、あいつとは子供の時からずっと仲が良かった、高校の時なんか、バスと電車で二時間もかけて一緒に通ったものです、といってみた。そうだったわね、ふたりともやんちゃ坊主で、と潤一の母親

はいった。

「おじさんによろしくいって下さい」

「あなたは優しい、いい青年になったね」

内心、僕はどきまぎした。ゴールデンウィークの前に、父も母も資料館も村もかえりみずに都会へ出て行こうと、固く誓っているのだ。優しい、いい青年。他人の眼からちよつとでもそう見えることが耐えがたい。

「とにかく潤一に会って来ます」

早々と僕は立ち去ることにした。潤一の母は広々とした庭に洗濯物を干しはじめた。背中を向け車に歩いた。何故あいつは車を家に置かないのか、貯水池の駐車場まで歩いたら、たつぷり十分はかかるのに、とふたたび思った。しかし、おばさんに直接たずねていいことではなさそうだった。おじさんと潤一もじっくりいい口振りだったのを思いだす。車に乗った。ドアを閉めた。いい青年、という言葉を振り払おうとした。潤一がそれを聞いたら皮肉をこめて笑うかもしれない。潤一は僕がこの村を出て行きたがっていることをちゃんと知っている。あいつが村に戻った時、その足で資料館をたずねて来た。元氣そうだな、といったあとで、おまえ、だんだん資料館にふさわしい顔つきになって来たぞ、といった。冗談じゃない、ゴールデンウィークの前には他

りだ。村のどこにでもある見慣れた風景が車の外を流れて行く。時々、場違いのように清涼飲料水の自動販売機が埃を被って突っただっている。

母は畑でそろそろ一服休みでもしている頃かもしれない。父のことで母が気をもむひとつの理由には、利恵のことが含まれている。おまえの結婚にだってさしさわりがあつたら困るじゃないか、と母が口にする時は、利恵のことが頭にあつてのことだ。母の願いは、息子が利恵と結婚し、平凡な家庭を築き、孫の顔を見ることがだ。そう思うと、胸がわずかに軋んで疼く。しかし、それもわずかだ。すぐ忘れた。狭い道の両脇は、四月の草が生い茂り、うっとうしいほどだった。窓から入り込んで来る風が皮膚をなぶった。ハンドルを操作しながら、僕は口笛を吹いた。潤一に会い、利恵と言葉少な話し、父の所へ立ち寄り、そのあと人口十五万人の小都市まで行く。自由な一日なのだ。それを思いだした。

うねった道を登りきった所が利恵の家のマス釣り場だった。街から来た客は誰もいない。古い木造の建物の入口に、入漁料の代金を書いた看板が出ている。建物の左脇に、釣り場になっている溪流が見えた。砂利を敷きつめた駐車場に車を入れた。そこからフェンスになっていて、釣り場に入れば片側をずっと覆っているはずだ。

の場所で暮しているよ、と僕は事務所にいる館長に聞こえないように低い声をだした。好きにするさ、とあいつはいった。あの時、車を見せてもらった。いい車だ、高かったろう、と僕はシルビアを一周して話した。中古さ、どうってことはないよ、今時、中古車センターに行ったら外車だって掘り出しものはごろごろしてるぞ、とあいつは答えた。

車を道に出した。貯水池で会った女の顔がちらついた。潤一の母と僕の母の顔もだ。腕時計を見る。まだ九時四十分だ。ここでは時間の流れがとて遅く感じられる。人々はゆっくりと齢をとる。けれど僕は真つびらだ。

潤一の家を出た足で、そのまま利恵の両親が経営するマス釣り場まで車を走らせた。まったく潤一もどうかしている。ここに住んでいる人間なら、必ず溪流で釣る。確かに、マス釣り場は川の一部を利用しているとはいっても、溪流に比べればやはり釣り堀同然だ。しかもこの十日間、毎日入りびたっている様子だった。マス釣り場へ行く、うねうねと曲がりくねった細い山道を走らせながら、五日ぶりに会う利恵のことを思い浮かべてみた。道はすいていた。対向車もない。日曜日には釣り場へ向かう車でひどく混雑するのだ。道がすいているのは何よ

駐車場の片隅に自転車が一台置いてあつた。潤一のだ、と直感した。せつかくの車を使わないなんて、本当に何を考えているのだろうか。だが、利恵のマス釣り場にあんなスポーツカーが一台ぼつんとあつたら、それも何だかお笑いだ。あいつにあつたら、車のことや女の子のことや、毎日あり余る時間を持って余しすぎて、何ひとつやるべきことのない男のようにマス釣りで暇潰しをしていることを、軽い気持でひやかしてやろう。

ワークブーツで砂利を踏み、薄暗い建物に入った。生臭い魚の匂いが、黒光りしている柱や壁にこびりついているようだった。中央にある広い木製のテーブルの前の椅子に坐った利恵が真つ先に眼に入った。おかつぱのように飾り気のないヘアスタイルで、うつむいて熱心に雑誌を読みふけている。入口に突っ立って僕は、こぶしで壁をとんと叩いた。利恵が顔をあげた。化粧もしていない顔で僕を見、まぶしそうに笑った。僕が一番好きな表情だ。やあ、と僕は片手をあげた。

「そっか、今日は火曜日なんだ」

利恵が雑誌を閉じ、椅子から立ちあがった。机に雑誌を置く。美容の専門誌だ。そこは暗く広かった。外のガランとした景色が、あげた戸の向こうに見える、釣り場の浅い水の流れが利恵の背後にあつた。日曜日やゴールデン

ンウィークには、都会から来た人々で一杯になり、彼らの釣ったニジマスの腹をさいたり、塩をなすりつけたりする場所だった。包丁を手際よく使って、それらの仕事をときばきとこなしている利恵を、これまでも何度か見たことがある。

「まさか、釣りに来たなんていわないわよね」

「利恵に会いに来たんだ」

「本当？ うれしいな」

利恵は陽気で屈託もない声をだした。彼女といると、いつも感じることに、自分がまるで陽光の内にいるという感じが甦って来た。冗談、うまいんだから、だまされないわよ、と利恵は弾んだ声でいいながら、五日前の夕暮れ、渓谷を降りた河原で抱擁しあつた時のなごりのような熱っぽい眼をした。すると僕は潤一のことなどどうでもよく、彼女と話をしたくて来たのだ。彼女に伝えておくべき言葉があるのだ、という気持になった。

「でも、たまにはここで釣るのもいいかもな」

「毎日だって構わないんじゃない」

「潤一みたいにか」

利恵が、あら、よく知っているじゃない、という顔をした。

「あいつ、毎日、ここに来るんだって」

自動販売機にコインを入れ、冷たい缶コーヒーストを買いながら、さり気なくきいた。

「うん、毎日、自転車だね。あたしに気があるみたい」

「バカ」

コーヒーストを飲んだ。よくひえていて、ひと口飲むと、咽がひどく渴いているのがわかる。

「そんなんじゃないわよ。父さんがそう話すだけ。いいか、気をつける、都会からあんなチャラチャラした車で戻って来てブラブラしている若い者は信用しちゃあなんねえぞって」

利恵が親父さんの声や口調を真似たので、僕は声をあげて笑った。今日のはじめて心から笑った。そしてたぶん、それが村を代表する潤一への評価なのだ、と考えた。

「親父さんは」

「養殖の堀よ」

飲み終えたコーヒーストの缶をくずかごに捨てた。

「潤一に会って行こうかな」

「そんないい方を僕はした。」

「いいんじゃない。ふたりで、アウトドア・ライフなんて」

「わかったよ」

「釣りもやるよね」

「ああ、三十分ぐらいやるかな」

手ぶらで潤一と会うより自然だろう。

「エサは何がいいの。ブドウムシ」

「イクラにしてくれ」

「ぜいたくね」

「何が」

「マスがよ」

利恵はどこにも陰のない声でいって、広い部屋の片隅から、竿とエサ箱を持って来た。代金を払おうとすると人さし指を立てて僕の唇にあてた。じっと眼を見つめて、アウトドア・ライフってお金がかかるといって、から眼元をほころばせた。僕はまた声をあげて笑った。

やっぱり利恵に会いに来たようなものだ。そういおうかと思ひ、しかし僕は別の言葉を捜した。

「おまえな、きつといい男と結婚するぞ」

「あたりまえじゃない。ほら」

突きだすようにして、竿とエサ箱を胸に押しつけてきた。そうしながら、今日の夕方、会えるかなあ、といったずらっぱい眼になってささやくようにきいてきた。

「そうだな。今日は駄目なんだ。親父に会いに行くんだよ」

半分だけ本当のことをいった。

「明日は？」
「考えておくれよ」
「ずるいんだから」
「知らなかったのか」

僕はとほけて、潤一の顔でも見てくるかな、と釣り場へ向かった。石の階段を十五歩ほど降りるとすぐに浅い溪流になった。水の流れる音は柔らかく、釣り人は見あたらない。なんといいっても、平日の十時だ。潤一の姿も見えない。溪流のほとと下流にいるのだろうか。利恵との結婚。母はそれを強く望んでいる。なるほど僕にもそういうことがあっていいんだ。しかし利恵の両親が僕の父をどう考えているかはわからない。村の多くの人間がそうないように、まるでおかしな気味の悪い生きものでも見つめるように、利恵の両親も思っているかもしれない。そうであつても不思議はない。どうして父は自分の家の水に村の誰かが毒物を入れているなどといった、馬鹿げた考えにとりつかれてしまったのだろうか。溪流沿いに沢を下り、しかし、父のこつちを持ちだすのは僕の逃げ口上にすぎない、なんて奴だ、と自分を強く感じた。利恵は僕を、ずるいんだから、といった。あれはただの軽口だが、そうとばかりもいえない。ゴールデンウィークの前に村を捨てることを、まっさきに利恵に告げるべき

ではないか。僕には打算だけしかないともいうのか。潤一に、例の朝一番のバスで訪ねてきた女の話をしたら、帰りにはつきりと利恵にそれをいおう。

人のいない釣り場は奇妙だった。しんと静まり返り、バーベキューの煙も、子供のはしやぎ声もない。反対側は沢に沿ってフェンスがなだらかに続き、自然の溪流を利用した釣り場にはマスが身をひるがえす姿も見えない。きつと利恵の親父さんは養殖の堀からマスを放流していないに違いない。突き出た岩場があり、そこを曲がった時、六十メートルほど先で潤一が水面を見つめて糸をたれている姿が見えた。おおい、と僕は叫び、急ぎ足で近づいた。隣りに立った時、潤一が僕をちらりと見、すぐ釣り糸に視線を戻した。よく、ここにいるとわかつたな、といった。おばさんにきいたんだ、と答えると、そうかと頷いた。僕は竿を脇に挟み、すぐエサをつけながら、釣れたか、ときいた。

「まるつきりだ。このマスは頭がいいよ」

「毎日、来ているんだって」

「ああ」

「なんだか引退した老人みたいじゃないか」

軽口のもりだったが、潤一はにこりともしなかった。そして、釣りに来たわけじゃないだろう、と僕にきいて

きた。まあな、と僕はつぶやき、糸を上流に投げこんで、浅い水の流れにまかせた。どうもこうもない。単刀直入でいい。

朝のバスで女が潤一を捜しに来たことを、僕は話した。「そうか。来たか」

さして驚くふうでもない口調だ。僕として深くたちいる必要はこれっぽっちもない。用件だけ告げればそれでいいことだ。

「俺の家は教えたか」

「いや、その前におまえの耳に入れたほうがいいと思っ
てね」

「友達思いだな」

「そう思うか」

思いがけず語調が強くなってしまった。どちらともなく自然に口を噤んだ。潤一は釣り糸をあげ、新しいエサに取りかえた。もとより僕はこんな場所でマスを釣る気もなかった。放流されるマスは空腹で、小学生にだつたやすく釣れるのだ。だが、ふたたび糸をたれた潤一は僕よりも、もつとやる気がなさそうだった。僕は竿を河原にあげ、ジーンズのポケットからしわくちやの煙草を出して吸った。潤一が竿を持ったまま、くれないか、といった。潤一の所へ行き、一本出して口にくわえさせた。

口を利くきつかけができたので、車をどうして家に置かないのか、と僕はきいた。

「親父が目ざわりだとき」

納得したように二、三度頷いて僕は紙マッチで火をつけてさしだした。潤一は顔を近づけ、炎を通して僕の眼を上眼づかいに見た。そして、女は何かいつていたか、ときいた。

「今日一日、貯水池にいるそうだ」

「勝手にするがいいんだ」

潤一が炎から顔を離した。

「一緒に暮していたんだろ」

「そんなことも話したのか」

僕は石の上にはしゃがんだ。馬鹿らしくて釣りなどできない。

「電機会社はやめてきたのか。あそこは大手だろ」

「会社には休暇届けを出している」

「こんなに長い期間か、と思った」

「帰るんだろ」

「そりゃあ、いわれなくなつたって戻るさ。でもあの女とは暮せないんだ」

「話しぐらいしてやつたらどうだ。わざわざこんな山奥まで来たんだ」

潤一は口を噤んだ。ひと呼吸置いて喋った。

「三時まではマスを釣る」

「それから」

「貯水池に行く」

「そうか。何があつたのか知らないが、ダムに飛び込まれちゃ大変だ」

「そんな女かよ」

「じゃ、どんな女だつていうんだ」

「男は俺ばかりじゃないってことさ。彼女にとっては俺もそのうちのひとりにすぎないのさ」

それでも、一緒に暮していたんだろ、という言葉を僕はのみ込んだ。潤一の言葉だけを一方的に信じるわけにはいかない。すくなくとも駐車場で声をかけられた時は、そんな女には見えなかった。潤一が話を変えた。

「なあ、利恵はいい娘になったな。結婚するんだろ」

「まだ、そんなことはきめていないよ」

「本当におまえ、村を出て行くのか」

「ああ、そのつもりだよ」

「街に住んだって、別にいいことなんか何もないぞ」

僕は、潤一とは違う、と聞いたかった。心を病んだ父と、父に関する村人のひそひそ話に敏感な母。小石を拾い、溪流に放りなげた。

「これから何年も資料館に坐っているというのかい」
そうして都会の人間を眺め、ゆっくりとゆっくりと齡をとる。

「それなら、利恵を連れていけばいいさ。おまえたちら、どこへ行ってもうまくやれるよ」

「そんなことはわからないな」

僕は潤一の釣り糸を眺めていった。まるで釣る気もない。ただの暇潰しだ。

「三時には貯水池に行くんだな、潤一」

「ああ、できたらそう伝えてくれないか」

「何で僕が……」

「さっきおまえがいったらう。ダムに飛び込まれちゃ大変だ」

「僕は駄目だよ。親父の所へ行くんだ」

「そのついででいいんだがな」

「今、行ってやればいいじゃないか」

「マスが釣りたいんだ。そのために村に戻ったんだからな」

伝えるとも、伝えない、とも僕はいわなかった。こんな話をいつまでもしても仕方がない。たかだか女とのめごとぐらいで、と思った。資料館とおさらばして街へ出たら、僕はどんなことがあっても、二度と村へは

戻らないだろう。もう行く、と潤一に声をかけて立ちあがった。ああ、と氣のない返辞が帰って来た。じゃ、と

いつて離れた。振り返らなかつた。

建物に戻った。利恵に竿とエサ箱を渡した。潤一のこととはきかれなかつた。さして興味があるふうでもない。

「なんだ。もうやめちゃつたの」

「ここで釣ってもおもしろくないよ」

「いつてくれるわね。日曜日になったら繁昌するのよ」

建物の奥の壁に竿を立てかけて利恵はいった。あんな、利恵、と僕は彼女のほっそりとした背中に声をかけた。

「なあに」

「ゴールデンウィークの前に……」

「何かいい話」

「村を出ようかと思っている」

背中を見せたまま利恵は竿を置く手をとめた。ゆっくり振り返った。眼を見ひらいている。僕のいった言葉の意味が、急にはのみ込めなかつたのかもしれない。

「いやだ、そんなの」

利恵が低いのはつきりとした声で叫んだ。

「きめたことなんだよ」

「あたしはどうなるの。いやだ」

僕は首を振った。真底、人を納得させるだけの言葉を

僕は持つているだろうか。

「あたしは？ 連れてつてくれるの」

「利恵は残れよ」

「あたし、いい奥さんになる自信あるよ。あんたが行くならついて行くから」

「親父さんやお袋さんが黙っていないだろ」

「あんたとあたしの問題じゃない。両親のことなら何とかするわよ」

「駄目だ。街で落ち着いたら連絡する。約束は守る」

「何の約束よ。勝手に約束だなんて、そんなもの作らないでよ」

利恵はじつと僕を見すえ、前歯で唇を噛んだ。

「とにかく、明日は会える？」

「しっかりと僕は領いた。建物の古い柱時計を見た。父の所へ行かなければならない。それから十五万人の小さな街にもだ。ずいぶんぐずぐずと時間を潰した。」

「明日、ゆっくり話せる？」

「うん」

利恵が近づいて来た。黙って、並んで外へ出、砂利の駐車場へ行った。車に乗り込もうとすると、早口で利恵がいった。

「忘れないでよ。本当にあんたとならどこでだってあた

しちゃんとやれるんだから。ここだって、都会だって。別に、潤一さんみたいな車を慾しいわけじゃないんだから」

「忘れないよ」

車に乗り込んだ。お父さんのこと、あたしの家じゃ何んにも思っていないからね、と利恵が出し抜けにいった。「父さんも、母さんも、ひと言も悪口なんかいったことないよ」

村を出て行く理由。懸命にそれを考えているんだ、とわかつた。ありがとう、と僕は車の中から、眼を潤ませている利恵にいった。

「礼なんかいらぬ。子供の時からあんたのお父さんのこと、よく知ってるんだから」

おふくろにそう伝えておく、と僕はいったが、それは何だか自分の中に沈んで行く声のようだった。

父の住んでいる廃屋まで行くあいだ、利恵のことが頭から離れなかつた。自分がわからなくなりそうだった。だらしがなく、と僕は道を見つめ、時々、ハンドルを片手で叩いて声に出した。

父の家に行くためには、一度貯水池に戻り、ダムと反対方向の、山と貯水池のあいだの道路を走らねばなら